



大妻多摩中学校

二〇二二（令和4）年度

入学試験問題（第三回）

【国語】

時間 50分

2月4日（金）

【注意事項】

- 1 問題は17ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の一部に省略した箇所がある。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

スマホへの①ぼく漠とした不安の正体は何なのか。この問いについて考える前に、まず、皆さんに質問をしたいと思います。

① 日常的におしゃべりする友たちは何人くらいいますか？

② 年賀状やSNS、メールで年始の挨拶あいさつを発信しようと思うとき、リストに頼らず、頭に浮かぶ人は何人くらいいますか？

いかがでしょう。ぼくが今まで学生などに聞いた限り、①は10人くらい、②は100人くらいまで、というのが標準的な答えです。これは、おそらく全国どこでも同じだと思います。

ぼくが、なぜこのような質問をしたかという点、今、「自分がつながっている人」の数と、「実際に信頼関係でつながることができる人」や「信頼をもってつながることができる人」の数の間にギャップが生まれているのではないかと、そして、このギャップの大きさが、現代に生きる人たち、特に生まれたときからデジタルに囲まれた世界に生きる若者たちの不安につながっているのではないかと、そう思うからです。

人間は、進化の歴史を通じ、一貫して付き合う仲間の数を増やしてきました。これは、人間の祖先が熱帯雨林からサバンナという危険な場所に進出したことが関係しています。長い歴史のある時点において、おそらく地球規模の寒冷・乾燥化が起こり、それによつて熱帯雨林が分断され、そこで暮らしていた動物たちはサバンナに出て行くか、森が残る山に登るか、低地に散在する熱帯雨林に残るかの選択を迫られたのでしょう。結果的に人間は熱帯雨林を出ました。

そこで、いくつかの特徴とくちょうを発達させたのです。その一つが集団の大きさです。危険な場所では、集団の規模は大きいほうが有利です。数が多ければ、一人が狙われる確率は②②なるし、防衛力ぼうえいりょくも増します。危険を察知する目がたくさんあれば、敵の発見効率

も高まります。実際、森林ゾウとサバンナゾウでは、サバンナゾウのほうが、身体も大きく、集団規模も大きい。人間も、危機から自分の命、そして仲間の命を守るために、集団の規模を大きくしなければなりませんでした。

③、集団を大きくすると、食物や安全な休息場所をめぐってトラブルが増えます。仲間の性質や、自分との関係をきちんと頭に入れておかないとうまく対処できなくなります。そのためには脳を大きくする必要があります。皆さんの中には、人間の脳は、言葉を使い始めたことで大きくなったと思っっている人がいるかもしれませんが、人間が言葉を話し始めたのは7万年ほど前にすぎません。一方で、脳が大きくなり始めたのは、それよりずっと以前の約200万年前に遡ります。④言葉を使ったから脳が大きくなったのではないのです。

人間の脳の大きさには、実は集団規模が関係しています。チンパンジーとの共通祖先から分かれた約700万年前から長らくの間、人間の脳は小さいままでした。この頃の集団サイズは10〜20人くらいと推定されています。これは、ゴリラの平均的な集団サイズと同じ。言葉ではなく、身体の⑤だけで、まるで一つの生き物のように動ける集団の大きさといえます。サッカーが11人、ラグビーが15人など、スポーツのチームを考えるとわかりやすいでしょう。これは、皆さんが、互いに信頼し合っておしゃべりをする友だちの数①に当たります。200万年前、脳が大きくなり始めた頃の集団サイズの推定値は30〜50人程度。ちょうど先生一人ですとめられる一クラスの人数ですね。日常的に顔を合わせて暮らす仲間の数、誰かが何かを提案したら分裂せずにまとまって動ける集団の数です。

その後、人間の脳は急速に発達します。今から約60万〜40万年前には、ゴリラの3倍程度の1400ccに達し、現代人の脳の大きさになりました。そして、この大きさの脳に見合った集団のサイズが、100〜150人。これが②に当たる数です。

これは、ロビン・ダンバーというイギリスの人類学者が、人間以外の霊長類の脳の大きさと、その種の平均的な集団サイズの相関関係から導き出した仮説に基づく数字です。ダンバーは、平均的な集団サイズが大きければ大きいほど、脳に占める大脳新皮質、つまり知覚、思考、記憶を司る部分の割合が大きいことを明らかにしました。

そして、現代人の脳の大きさに見合った集団の人数を示す、この「150」という数字は、実に面白い数字であることがわかりま

した。文化人類学者の間で「マジックナンバー」といわれているのはそのためです。

食料生産、つまり農耕牧畜を始める前まで、人間は、この150人くらいの規模の集団で狩猟採集生活を送っていました。天の恵みである自然の食物を探しながら移動生活をする人々には、^⑥土地に執着したり、多くの物を個人で所有したりといったことがありません。限られた食料をみんなで分け合い、平等な関係を保って協力し合いながら移動生活を送るためには、150人が限度なのでしょう。そして、現代でも、このような食料生産をしない狩猟採集民の暮らしをしている村の平均サイズが、実に150人程度なのです。

言い換えれば、150人というのは、昔も今も、人間が安定的な関係を保てる人数の上限だということです。皆さんの生活でいえば、一緒に何かを経験し、喜怒哀楽を共にした記憶でつながっている人ということになるでしょうか。ぼくにとっては、年賀状を出そうと思ったとき、リストを見ずに思いつく人の数がちょうどこのくらいです。互いに顔がわかって、自分がトラブルを抱えたときに、疑いもなく力になってくれると自分が思っている人の数ともいえます。

今、ぼくたちを取り巻く環境はものすごいスピードで変化しています。人類はこれまで、農耕牧畜を始めた約1万2000年前の農業革命、18世紀の産業革命、そして現代の情報革命と、大きな文明の転換点を経験してきました。そして、その間隔はどんどん短くなっています。農業革命から産業革命までは1万年以上の年月があったのに、次の情報革命まではわずか数百年。この^⑦四半世紀の変化の激しさを考えれば、次の革命まではほんの数十年かもしれない。その中心にあるのがICT (Information and Communication Technology = 情報通信技術) です。インターネットでつながるようになった人間の数は、狩猟採集民だった時代からは想像もできないくらい膨大になりました。

一方で、人間の脳は大きくなっていません。つまり、^⑧という事です。テクノロジーが発達して、見知らぬ大勢の人たちとつながれるようになった人間は、そのことに気づかず、AIを駆使すればどんどん集団規模は拡大できるという幻想に取り憑かれている。こうした誤解や幻想が、意識のギャップや不安を生んでいるのではないか。ぼくはそう考えています。そして、子どもたちの漠とした^⑨不安も、このギャップからきているのではないのでしょうか。

人間はこれまで、同じ時間を共有し、「同調する」ことによって信頼関係をつくり、それをもとに社会を機能させてきました。「同調する」というのは、たとえば、ダンスを踊ったり歌を歌ったり、スポーツをしたり、あるいは一緒に掃除をしたり、同じように身体を動かしたり調子を合わせたりしながら共同作業をするということです。

人間のコミュニケーションにおいて大事なものは、時を共有して同調することであり、信頼はそこにしか生まれません。母と子が、何の疑いもなく信頼関係を結ぶるのは、もともと一体化していたからです。胎児のときは、お母さんの動きを直に感じとっています。そのつながりは、その後、赤ちゃんとして母親の身体の外に出た後、へその緒を切つても残ります。

そして、そのつながりを、音楽や音声、あるいは一緒に何かをするという形で継続しているのが家族や仲間などの共同体です。こうした共同体がもつ文化の底流には、同じような服を着たり、同じテーブルを囲んで食事をしたり、同じような歌を歌ったり、同じような作法を共有したりといった、身体を同調させる仕掛けが埋め込まれています。人々はそれを日々感じることで、疑いをもつことなく信頼関係をつくり上げています。信頼は、こうした継続的な同調作用がなければつくれません。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』(ポプラ新書)より)

問1 — 線部①「漠とした」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 満たされず、非常に空しい気持ちになる
- イ 心中で強く確かな引っかけをおぼえる
- ウ 言葉できちんと説明することができない
- エ 自分で確かめられないほどの非常に小さな

問2 [2] に当てはまる形容詞一語を、下にうまくつながる形で、答えなさい。形容詞とは「寒い」「美しい」といった言葉のことをいいます。

問3 [3] に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア だから
- イ ただし
- ウ つまり
- エ たとえば

問4 — 線部④「言葉を使ったから脳が大きくなったのではないのです」とありますが、では、なぜ大きくなったのですか。その説明に当たる次の文の [] に、十字以内の適切な言葉を入れなさい。

[] 必要があったから。

問5 [5] に当てはまる言葉として最も適切なものを、本文48行目以降から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問6 — 線部⑥「土地に執着したり」とありますが、「土地に執着する」とはどのようなことですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア その土地に居^い続^つけて食料を採集しよう、と考えること。

イ 少しでも広い土地を他の集団から奪おう、と考えること。

ウ より多くの食料を採集できる土地を探そう、と考えること。

エ その土地を素晴らしい場所として大切にしよう、と考えること。

問7 — 線部⑦「四半世紀」とは何年のことですか。最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 二十五年

イ 五十年

ウ 七十五年

エ 二百年

問8 — ⑧に当てはまる言葉を、次の文の X Y を埋める形で、文章全体を踏まえて考えて答えなさい。Xは二十

字以内で、Yは三十字以内で、それぞれ答えること。

ICTの発達によって

X

にもかかわらず

Y

問9 — 線部⑨「不安」とはどのような不安だと考えられますか。それを説明した次の文の に適切な言葉を入れなさい。

インターネットなどの上ではつながっているが、

は築けていないのではないか、という不安。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

中学二年生の森田窓香^{まどか}は、幼少期にアメリカで暮らした経験を持つ。八歳の時、ジャーナリスト^{じやーなりすと}を志す母をアメリカに残し、父と二人で日本に帰国した。それ以来、再び母に会うことは叶^{かな}わなかった。

次に続く場面は、夏休みを前にした学校のホームルームの時間の出来事である。

「今年は、グループで研究をします。グループごとにテーマを決めて、共同研究ね。夏休み中には、図書室とミーティングルームを自由に使えるようにしておきます。きょうはまずグループを決めて、それからグループに分かれて、研究テーマを決めます」グループか。

ますますめんどくさいな。だって、適当にサボれなくなる。

さざ波のなかに、ささやき声が混じっている。

何を言っているのか、まではわからない。

「そして、九月と十月には毎週、このホームルームで、それぞれのグループの研究発表をしてもらいます。その後、クラスの代表グループを決めます。代表に選ばれたグループは、十一月の学校祭で発表することになります。その発表の方法ですが……」

そのつづきは、黒板に書かれた。さらさらと。

【研究発表Ⅱ日本語と英語の両方によるレポート（作文）を朗読↓全校生徒による投票↓優勝グループは学校代表として「中学生の主張 県大会」に出場】

先生が板書をしているあいだに、^①さざ波ははつきりと、ざわめきに変わった。「うそーっ」「やだー」というような女子の声も混

じっている。「まじかよ」という男子の声も。

うしろに座っている子が「なんで英語なの？」——わたしもそう思った。

中学生の主張？

これって、自由研究っていうよりも、強制的弁論大会じゃない？ そうか、吉田先生は英語の先生だから、日本語と英語でおこなわれる県の弁論大会に、教え子を出場させたいと願っているのか。

雑音を封じこめるような、先生の明るい声が教室内に響きわたった。

「さ！ まずはグループを決めましょう。そうと決まったら、我がクラスからぜひとも学校代表を出さなくっちゃね」

（中略へくじを引き、グループが決まる。「わたし」は、玲奈、坂本くん、その他男子二人と一緒にグループになった。そのままグループごとの研究テーマを決める話し合いに入り、玲奈は「一冊の本ができるまで」を、男子のうちひとりには「戦国武将の生きざま」を、もうひとりには「パンダの生態」を提案した。）

25

坂本くんは、意外な提案をした。

「世界の菓子」

一瞬、歌詞かと思ったけれど、

「②」

わたしは思わずそう聞きかえしてしまった。まあ、お菓子のことなら、おばあちゃんに聞けば、なんでもわかるかも、なんて思いながら。

「うん、ケーキとか、タルトとか、クッキーとか、そういう菓子」

坂本くんはわたしのほうをまっすぐに見て、言った。

30

20

15

わたしの耳の付け根が熱くなっている。(注1) カミちゃん、どうしよう。わたしたち、見つめあってる。ほとんど同時に、男子のひとりがちゃかした。

「おっかしいよ、坂本。」

もうひとりの男子もへらへら笑っている。

おかげで、わたしの緊張と興奮は、だれにも気づかれなかった。

坂本くんは、くちびるをとんがらせた。

「⑤」 だつてさ、菓子って、フランスとかドイツとか、だけじゃなくて、たとえばアフリカにもアラブにも

南米にも中近東にもあるわけだろ？ もしかしたら、北極とか南極とかにもあるかもしれないだろ。世界の菓子がどうなっているか、おまえ、知ってるか？ カステラなんかはさ、ポルトガルから日本へやってきたんだよ。そういう菓子の歴史というか、要は、グローバルな視点で菓子の研究をするんだよ」

「⑥」

と、玲奈がフオローした。

わたしもフオローしなくちゃ、と、思ったとき、坂本くんがふたたびわたしのほうを向いた。

「森田さんの提案は？」

長いまつ毛の下の瞳の色は、「アーモンドクッキー色」と呼びたくなるような茶色。見つめられて、わたしの頭のなかは、まっ白になっ

ている。
ふたたび、⑦ まっ白な答案用紙の登場。

さつきまで提案しようと思っていたテーマが、ばらばらに解体して、ちぎれ雲になって、空を漂ただよっている。雲を引きよせ、むりやりひとつにまとめるようにして、わたしはつぶやいた。

「戦争と子ども」

四人とも急に、黙ってしまった。

今夜も、勉強机のいちばん上の広い引き出しのなかから、母のノートを取りだして、わたしはページをめくる。

もう、どこにどんなことが書かれているのか、すっかり頭のなかに入っているから、母の書いた文章を読むというよりは「見る」という感じになっている。

母は^(注2)ウガンダのあと、^(注3)コソボへ行き、もどってきてからは、大学院のレポートや論文に追われつつ、^(注4)ビザを取るための求職活動をおこなうかたわら、^(注5)ジェフリーさんのアシスタントとして、アフガニスタンとパキスタンの国境にできているという難民キャンプの取材に出かけた。

その途中で体をこわしてしまい、ジェフリーさんを現場に残してひとり、アメリカにもどった、と書いてある。**(中略)**

それでも、アメリカにもどったあと、子どもたちが難民キャンプでどんな生活をしているのかについて、母は短い記事を書いた。

ジェフリーさんの撮影した写真——とても大きい——に添^そえるような形で。

雑誌に載った記事は切りぬかれて、ノートに貼りつけられている。

テントの前に立っている幼い子ども写真。

汚れた顔がアップで撮影されていて、瞳に宿っている光までが写っている。

⑧ その光のつづが、わたしの胸をつきさす。おそらく、わたしだけじゃなくて、この写真を見た人はだれもが、胸を痛めるだろう。

なんとかできないか。何かできないか。どうしてこんなことが起こっているのか。そんな思いにかられて、でも結局、自分には何もできないと思ってしまう。無力感にさいなまれる。さいなまれながらも、何もできないまま、きょうも食べ物をいっぱい食べて、あまった食べ物を捨てたりしている。なんとかできないか。何かできないか——。

母の書いた記事を読みながら、わたしもそんな堂々めぐりにおちいる。

(中略) **母の書いた英文の記事**

母の書いた英文を、頭のなかで日本語に置きかえてみる。

砂漠の上に張りつくようにして、はるかかなたまでつづく、無秩序なテントの群れ。こんなところに人が住めるのか。砂ぼこりと、やけどしそうなほどの熱風。終わりのない、失望と絶望の生活。電気も水もトイレもない。最初に命を落とすのは、老人と子どもたち。アフガニスタンでは、難民の子ども四人のうちひとりには、五歳以上は生きられないのが現実。みんな、空腹。食べ物が足りない。子どもたちは、空になっっている鍋なべの底まで、なめるようにして食べている。

ページから顔を上げて、母に呼びかけてみる。

母と話をするときには、自然に八歳の女の子——母と別れたときのわたしの年——になっている。

ねえ、マミー。

聞いてほしいことがあるの。

アフガニスタンのせまくるしいテントのなかで、難民の子たちがおなかをすかせて苦しんでいるというのに、わたしは快適な自分の部屋にいて、おいしいものをいっぱい食べて、どうでもいいようなことばかり、考えてる。どうでもいいようなことだとわかってるのに、でも今のわたしにはこのことしか、考えられない。

わたし、もしかしたら、恋をしているのかも？

ねえ、マミーの初恋って、どんな感じだったの？

話しかけながら、わたしはきょう、ホームルームで聞いた坂本くんの言葉を、ひとつひとつ、大切にすくいあげるようにして、母に教えてあげる。

坂本くんは、わたしが「戦争と子ども」と言ったあと、つかのま、黙っていたけれど、四人のなかで最初に口を開いて、こう言っ

たのだった。

力強い言い方だった。

「いいね、それ。クールだよ」

「クールって、おまえ、本気？」

「本気だよ。戦争と子どもってさ、結局、世界の菓子ってことだろ。それで行こうよ。決まりだ！」

残りの三人は、⑨を白黒させていた。

わけわかんないって顔をしていた。

わたしにもわからなかった。

「戦争と子どもが、なんで、世界のお菓子なの？」

問いかけた玲奈に対して、坂本くんは、自信たっぷりな笑顔を向けた。

「世界の子どもたちが、どんな菓子を食べているかってことはさ、たとえば戦争中や紛争中の国で、子どもたちがどういう生活をしているのかってことでもあるだろ？ たとえば難民キャンプで、難民の子どもたちはどんな菓子を食べているのか。そういうことでもあるわけだろ」

「坂本、おまえ、こじつけてるな」

「ばかだね、すりかえていうんだ、そういうのは」

「えへへ、ばれた？」

坂本くんはぼりぼり頭をかいたあと、まるで宣言するように言い放った。

「どうせ研究するんだったら、思いっきり、ハードなテーマがいいよ。ハードでホット」

「ハードボイルドってことか」

「おまえ、さつき、クールって言わなかった？」

きりつとした表情になって、坂本くんは言った。

「^⑩ クールだけど、ホットなんだよ。本と戦国武将とパンダの研究なら、小学生でもできるじゃない？ ぼくは、森田さんの案に一票を投じるよ。戦争と子ども、ってことはつまり、戦争とぼくたち、ってことじゃない？」

「同感！ かつこいいい！」

玲奈が拍手をした。そしてこう言った。

「たしかに、簡単なテーマよりも、難しいテーマのほうがいいよ。やりがいがあるもん、ね、窓香、そうだよね？」

反射的に、わたしはうなずいた。

坂本くんが拍手をすればじると、つられて、男子ふたりも手をたたいた。

「しょうがねえなあ」「戦争か」「戦争と子どもか」などとぼやきながらも。

(こでまり
小手鞠るい『窓』〔小学館〕より)

注1 カミちゃん——「わたし」の親友。昨夜、坂本くんへ思いを寄せていることを電話で相談した。

注2 ウガンダ——アフリカ東部、赤道上にある共和国。

注3 コソボ——東ヨーロッパにある共和国。二〇〇八年に独立。

注4 ビザ——ここでは、アメリカで就職し、働き続けるための許可証明書のこと。

注5 ジェフリーさん——戦争報道カメラマン。母はアメリカで彼の助手として働いていた。

問1 — 線部①「さざ波ははつきりと、ざわめきが変わった」とありますが、どういうことですか。これについて説明した次の文の X・Y に入る内容を、自分で考えて、それぞれ指定字数以内で答えなさい。

課題が想定外に X (十字以内) ため、生徒たちの驚きや不満の声 Y (五字以内) なったということ。

問2

②・③・⑤・⑥ に入る言葉として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、

その記号を答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア え、まじめに考えてるよ。

イ おまえ、何考えてるの？

ウ わかんないけど、違うんだ。

エ あの、菓子って、甘いお菓子のこと？

オ それって、けっこうユニーク、なんじゃない？

問3

— 線部④「緊張と興奮」とありますが、この状態を「わたし」自身が認識していることをよく示している一文を、ここより前から抜き出して、そのはじめの五字を答えなさい。

問4

— 線部⑦「まっ白な答案用紙の登場」とありますが、どういう状態を表現したのですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 坂本くんから不意に問いかけられ、考えていたことが頭からとんでいってしまったという状態。

イ 自分の提案は何かを問われてはじめて、今まで何も考えていなかったことに気づいたという状態。

ウ 坂本くんをフォローする答えが求められていると感じたが、それがとっさに見つからないという状態。

エ 皆の主張を聞いていたら、たくさんある自分の意見の中のどれを言おうかを選べなくなったという状態。

問5 — 線部⑧「その光のつぶが、わたしの胸をつきさす」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) この部分に用いられている表現技法として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 直喩法ちよくゆほう イ 反復法 ウ 擬人法ぎじんほう エ 倒置法 オ 体言止め

(2) この部分の「わたし」の心情を説明した次の文の X ・ Y ・ Z に入る内容を、それぞれ本文中の言葉を用いて答えなさい。

- X に心を痛めながらも、 Y ができず、 Z 自分へのもどかしさ。

問6 77行目～80行目の部分の表現の特徴や工夫についての説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 「無秩序なテントの群れ」というまるでテントが生き物であるかのような描写により、人々の生きる希望が表されている。
イ 「四人のうちひとりとは、五歳以上は生きられない」など具体的な数字を用いることにより、衝撃的な現状が表されている。
ウ 「空になつていゝ鍋の底まで、なめるようにして」という表現により、いかに現場が不衛生であるかが示されている。
エ 短文を並べることにより、文に勢いを持たせ、いかに現場の変化が激しく切迫した状況であるかが示されている。

問7 ⑨ に入る、身体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

問8 — 線部⑩「クールだけど、ホットなんだよ」とありますが、坂本くんがこの表現に込めた思いを、次の〔資料〕を参考に考え、その説明として最も適切なものを、あとのア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

【資料】

クール【cool】【形動】①冷たいようす。すずしいようす。②冷静で、落ち着いたさま。③かじょう恰好かじょうがいいさま。
ホット【hot】【形動】①熱いさま。②熱中したさま。熱気のあるようす。③最新であること。④「ホットコーヒー」の略。

ア 最初にクールと言ってしまったが、決して「冷たい」というわけではなく、テーマ決めだけでこれだけ盛り上がる皆で研究をすれば、その活動は「熱い」ものになるだろうと確信している。

イ ハードでホットなテーマは避けたいと考える「冷たい」仲間に、これをやりとげればクール、つまり「落ち着いていて、大人らしい」ではないかと伝え、皆の士気を高めようとしている。

ウ クールとホットは、一般的によく使われるカタカナ語としては対義語であると指摘を受けたが、辞書を調べれば、ハードもクールもホットも語源は同じであると弁解しようとしている。

エ クールとホットの二語は、「冷たい」と「熱い」と訳すと矛盾するが、ここでは「かっこいい」「かつ自分たちにとって身近で」「新しい」という意味で、研究テーマを前向きにとらえている。

問9

「共同」や「協調」という語は「パートナーシップ」と訳され、貧困や戦争をはじめとする世界のあらゆる問題を解決するために、すべての人々が築いていかなければならない大切な関係とされています。本文の主人公たちに課されたグループでの研究も、小さな「共同」作業のひとつです。

- ・ 共同で研究活動をするには、どのような良さと大変さがあるとあなたは考えますか。
- ・ 共同での研究活動をより良いものにするために、あなたが大切にしたいことは何ですか。

以上を百字以内で記述しなさい。

三

次の各問いに答えなさい。

問1

次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に直しなさい。

- ① オリンピックの競技をカ^ンセンする。
- ② 台風がセ^ツキンする。
- ③ 広島に原子爆弾がトウ^カされた日。
- ④ 夏休みにはキ^カイな話をよく耳にする。
- ⑤ 海や川ではスイ^ナン事故が多い。

問2

次のことわざや慣用語の□に入れるのに最も適切なものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① □の川流れ。
- ② 彼がチームに加われば□に金棒だ。
- ③ □の正体見たり枯^かれ尾花^{おぼな}。
- ④ 彼女はクラスで一番勉強ができると□になっている。
- ⑤ こんな目にあうなんて□にしまった気分だ。

- ア 鬼 イ 天狗^{てんぐ} ウ 河童^{かっぱ} エ 幽霊
オ 仏 カ 狐^{きつね}

以下余白

